第３回研究会

# ロンドン郊外Public Footpath Chess Valley谷歩き

龍谷大学名誉教授・研究フェロー・里山学研究センター研究スタッフ
江南　和幸

## はじめに

里山学研究センター2012年度年次報告書のイギリスの地域自然の保全に関する調査報告は、かねてより日本の自然保護活動のモデルとして熱く語られている、英国のコモンズとその具体的形態としてのパブリックフットパス（Public Footpath）についての現地のイギリスの各地の責任ある地位の人たちの聞き書きにより、市民と公共機関とが一体となって、自然環境と親しみ、保全をするきめ細かい仕組みが紹介され、市民の自然への思いを少しも汲み上げようとしない日本におけるお粗末な環境行政が図らずも浮き彫りとなっている。

筆者は、2013年５月末、大英博物館で開催された“Workshop on Ming Bank Note”（明紙幣のワークショップ）での講演のためにロンドンを訪問の折に、大英図書館の友人のMark Barnardさん、松岡久美子さんのお二人の協力により、ロンドン郊外のPublic Footpathの一つ

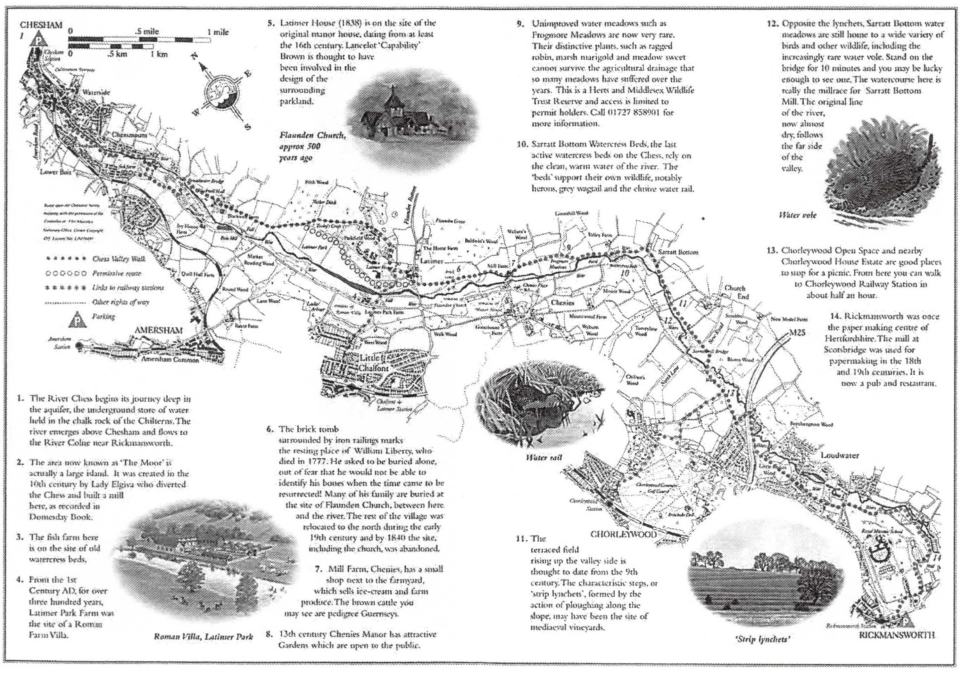


図１　Chess Valley Walk Map。ロンドン中央と西北の高級住宅地とを結ぶ地下鉄Metropolitan lineのRickmansworth 駅から終点のChesham駅までの地上を走る路線にほぼ沿って流れるChess Valley全行程16km、途中わずかの緩やかな上り下りのあるコース。

である、“Chess Valley Walk”を歩き、英国のPublic Footpathの姿を垣間見ることができた。

山ガールの流行を見る日本では、簡単なコースでも、道標の不備、コース中の施設不足などで道を見失うケースがしばしば報道されるが、谷の道に沿いながら、よく整備されたコース、コース案内、施設の完備など、日本よりはるかに少ないイギリスの自然を市民に精一杯触れてもらうための工夫が見られた。以下晴天のロンドン郊外半日の谷歩きピクニックを紹介しよう。

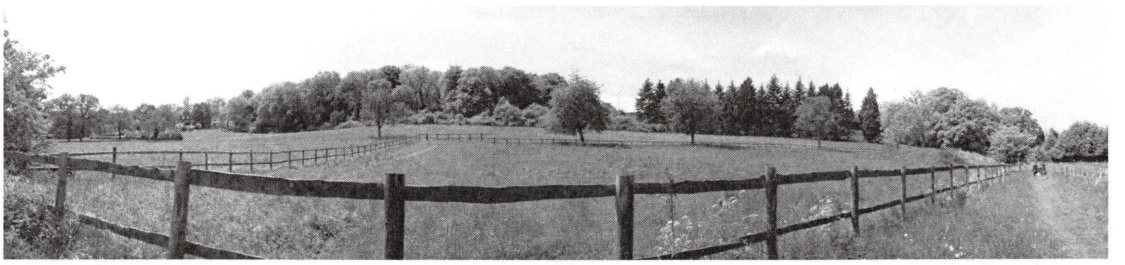

図２　谷の両側は牧草に覆われた広い牧場が広がる。コースの途中には、しっかりとした道案内が要所には必ず設置されている。案内表示が完備していないために、ハイカーが道に迷い、しばしばテレビのニュースで「遭難」騒ぎとなる日本のハイキングコースとは全く異なる。本日の案内人、Mark Barnard さんと松岡久美子さん。

## Chess Valley Walk半日の谷歩き

今回は図１の右端のRickmansworthから谷をさかのぼり、途中のChalfont & Latimer駅間の約10kmのコースを歩いた。駅前の公園を抜けてコースに入れば、すぐに牧場の間の小径が続き、小さな谷の流れが現れる。最上流は、白亜紀の名前の由来となった石灰岩地帯で、谷の流れはいたって緩やかで、道も平坦で子供連れも難なく歩ける格好のピクニックコースである。ほぼ全コース牧場がひろがる（図２）。石灰岩地帯を抜けてきたやや濁った水に加えて、牧場

図３　Chess Valleyの流れ。緩やかに流れる水は、淀んではいないが決して綺麗ではない。膝までの深さの底でも石には泥が薄くつもりよく見えない。

図４　小さな子供たちも安全な水遊びができる谷は、家族連れで大賑わいである。この奥には駐車場もあり、一部の場所は自動車でも入れる。水は少し汚れているが、子供たちはズボンを脱いで水遊びを楽しむ。

図５　丘に広がる春蒔き小麦畑。初めて出会った牧場以外の農地。

の汚れが流れ込んでいるため濁っている。Fishingも人気とはいうものの、比良山や京都北山の美しい渓谷の水とは大違いの谷の姿にはびっくりである（図３、４）。

図５は、コースの中ほどの丘に広がっていた春蒔き小麦畑である。このピクニックで初めて見る牧場以外の「農耕地」である。後で紹介する、クレソン畠を除いて、「野菜」栽培農業地はこのコースでは全く見られなかった。日本とは大きく異なる、土地の農業利用の姿が垣間見える。データから見る英国農業によれば、2002年の英国農業のうち果実・野菜にまとめられる項目の生産は、金額にして、野菜：948×100万ポンド、果実：257×100万ポンド。外国からの農産物輸入品のうち、果実・野菜に分類される項目は、2002年に4553×100万ポンドである。価格に換算しての、果実・野菜の自給率は、わずかに20%程度となる。最近では最大の輸入の見られた2001年の日本の野菜の輸入は968000トンで、国内総生産量の８%という。少なくとも、日本では「野菜」については、外食産業用途を別にすれば、完全自給に近いことになる。この違いが、ピクニックコース沿いの風景の大きな違いのもととなっていることは間違いない。

延々と続く平坦な道の半ばのところで、緩やかな登り道が現れた（図６）。道程が長いので低いようにも見えるが、Markさんは「これから山を登るけれどエナミは大丈夫か？」と気を使ってくれた。高さの差はせいぜい瀬田キャンパスの「龍谷の森」ほどである。

図６　Markさんがmountainと呼ぶ　本日唯一の登り。高低差せいぜい50mほどの丘

「山」を登ると、15世紀からの古い教会があり、やがて、The Cock Innという広いオープンスペースのレストランが現れた（図７a）。多くの家族連れがレストランで野外の昼食を楽しむピクニックコースといえば、日本では六甲山山頂のように往来の激しい自動車道路が縦断する観光コースぐらいである。

図7a　家族連れでにぎわうピクニック途中のレストラン The Cock Inn

図7b　レストランに植えられていたKanzan（寒山）。

図8　コースは途中高級住宅地の横を通り抜けたり、コースをまたぐ民有地を通る。民有地を利用する人への注意の看板。

レストランの庭には、驚いたことに日本のサトザクラのKanzan（寒山）の大木があり、散り初めではあったが、普賢象（フゲンゾウ）から出たことが分かる特徴的な２本のめしべが見られる美しい八重桜である（図７b）。このKanzanは今回のコースの終点のLatimerに広がるUpper-middleの住宅街の街路樹として植えられていたのにもびっくりであった。Kew Gardenにもこの桜を含むサトザクラ（八重桜）が沢山植えられていたが、英国人の桜の評価が日本とは大変違うことが伺えた。

遅い昼食の後、時間を節約するため、コースを途中で打ち切り、Latimerへの道をたどることになり、道は広大な民有地を通過することになった。民有地の道の入り口には、図８にあるように、所有者のつつましい使用注意の看板が立つ。Commonsの精神をよく理解した所有者の気持ちが伝わる。これを「成熟した」資本主義の表れか、いまだに「囲い込み」が残る、「古典的」資本主義の名残かと見るか、Commonsの評価は必ずしも単純ではない。しかし敗戦後の「農地改革」を経て、里山所有が細分化され、今度は逆に、所有者によって市民への開放が拒まれ、かえって放置される「小所有的」日本の里山の姿を見るにつけて、日本的Commonsのあり方をやはりきちんと整理しないといけないと思えてならない。

やがて谷へ戻ると、コース案内にも「名所」として記述されている、クレソン畠が現れる。ロンドン郊外で初めて見た野菜畠である。滋賀県では湖西から湖北へかけての流れのあちらこちらに、インベーダーとして広がり誰も採らないクレソンも、ロンドンでは立派な野菜である。さすがに新鮮さが第一のクレソンは「国産」でなくては商品とならないと見られる（図９）。

図9　Chess Valleyコースの唯一の「野菜畠」。谷の流れを利用したクレソン畠が広がる。

図10は、コースの中に見られる保護すべき動物、鳥の注意を呼びかける看板である。日本でも都市の公園ではよく見るが、ハイキングコースでもこれぐらいの看板と説明があってもよい。

谷を抜けると、道は貴族の荘園領地に差し掛かった。教会では午後のお茶が通りがかりのハイカーにも開放され、地元の人たちに混じってお茶と手作りのケーキを楽しむ。教会を含むど

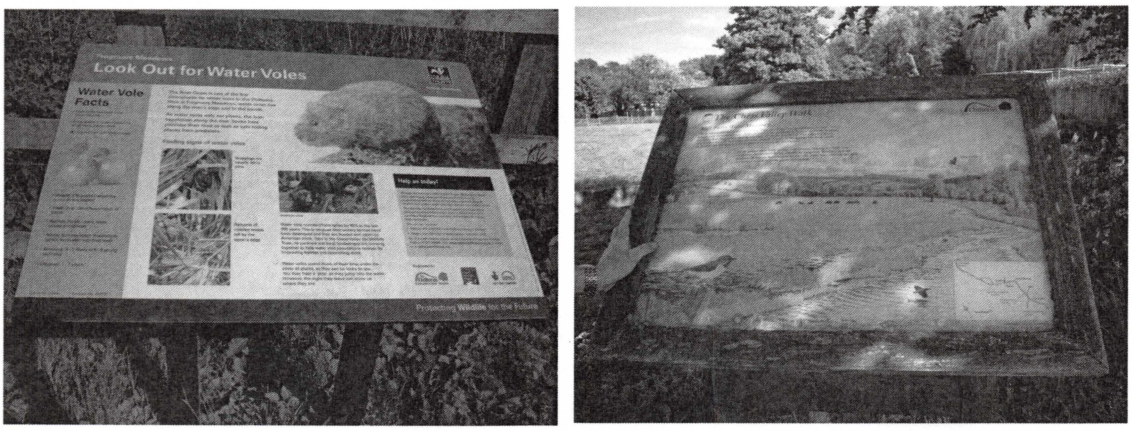


図10　コースの途中、谷を棲み家とする保護すべき重要な動物、鳥への注意の看板が解説付きでしっかりと立つ、ネズミの仲間のWater Vole。カワセミ（Kingfisher）とお腹の黄色いマミジロセキレイ（Wagtail）の仲間は、ロンドンでもやはり愛鳥家のアイドル。

図11　ロンドンに通りの名を残すRussell家の荘園領地内の教会とRussell家Manor House（荘園の別荘）。Russell家領地の教会での日曜日午後のお茶。通りがかりのハイカーもわずかの代金でお茶を楽しめる。周りの石垣には日本から入った斑入りのマサキ。別荘の館の壁にはツルアジサイ。

図12　荘園からLatimer駅へ抜ける森の道。足許には日本にはない、Bluebellが咲き乱れる。

の家も、建物の壁、石垣に日本から導入された、フジ、ツルアジサイ、斑入りマサキを植え込み、はるか東の果ての日本の花を楽しんでいる（図11）。

駅への道は今一度、森を抜けなければならない。荘園は森の奥に広がっていたことになる。道のそこここに、森やヒース、時として山地に広がるという、Bluebellという美しい花が群生していた。花の咲く植物の少ないイングランドの自然の中で、嬉しい出会いであった（図12）。

森を抜けるとまた牧場の中を通り、ようやくUpper middleの住宅街を経て駅へ出ることができた。街路樹にKanzanが並ぶ住宅街にもまた、庭には日本発の植物が溢れていた（図13）。

図13　Latimerの住宅街に溢れる日本の植物。カエデ（枝垂れモミジはタムケヤマ？）。街路樹にもサトザクラのKanzan。アマドコロと斑入りのマサキ。紅色の頂芽が美しいアセビはヨーロッパで園芸化されたForest Flame。

## 結びにかえて

わずか10km、半日のロンドン郊外Public Footpathのピクニックをもって、全長170000kmに及ぶイングランドのPublic Footpathを論ずることはこの報告の趣旨ではない。しかし、垣間見たFootpathの姿から、膨大な緑と美しい水とに恵まれる日本の（市民と行政双方を含めた）人たちの、自然という「資産」に対する意識と、英国の人たち（市民と行政双方）との意識と間に大きな違いが見えた今回のロンドンの休日であった。日本にはない美しい花のいくつかも見られたが、日本に比べてはるかに貧弱な植物相しかもたないイングランドの自然の中で、少ない自然資産だからこそ、その自然に市民が安心して接することができ、楽しめるような「仕掛け」が、Public Footpathの中には確かに存在していた。完備した道案内、施設、私有地を開放する地主の存在、などなど確かに「成熟」した資本主義の姿をそこに見ることも可能ではあるが、これは「資本主義」の成熟度が問題なのではない。1989年９月に、まだソビエトであったモスクワ訪問の折に、モスクワ郊外120km南のPushchino（プシチノ）に広がる「世界

最初の自然保護区：Prioksko-Terrasny国立自然保護区」公園に、一日１便の予約制の市民ピクニックバスに同乗し、保護区であるからもちろん周到な準備の案内者もつき、ヨーロッパバイソンの姿を見たり、たくさんのキノコを観察し（採取は無論禁止であったが）、モスクワ市民と一緒に豊かなロシアの森を楽しんだ経験からも、われわれ日本人の「自然資産」への感性の欠如が、今問われている気がしてならない。紹介したPublic Footpathを見て、「ロンドンの自然も大したことはない。日本のハイキングコースの方がずっと自然が豊かではないか」という人もあるいはあるかもしれない。山ガールに象徴される若い女性たちによる登山の流行も、美しい高山植物に溢れる高い山のある日本ならではの楽しみであろう。しかし2000mを超す高山への上級者登山は別にして、標高数百メートルの都市近郊の山でさえ、子供たちが道に迷い、「遭難」騒ぎが起こる日本のFootpathの危ふさは、どんなに自然が豊かであっても言い訳できるものではない。

森の利用者も、所有者も、行政もともに、工業国にあってはまれな豊かな自然資産をもつ日本にあって、日本だけでなく、世界の「自然資産」として人びとが安心して、やさしくそこに接し、楽しみ、学ぶ「仕掛け」を作らなければならないと思うことしきりである。